



令和3年4月22日

報道機関 各位

熊本大学

「佐賀の乱」時の細川家世子をめぐる 熊本での騒動を示した新史料を発見

（ポイント）

- 明治7（1874）年2月、佐賀県で明治政府に対する士族反乱「佐賀の乱」※が起こった際、政府の軍隊である熊本鎮台が旧熊本藩主細川家の世子（世継ぎ）を熊本城内に移そうとしたところ、それに旧熊本藩士族が強く反発した騒動があったことを示す日記が、熊本大学所蔵の「松井家文書」と熊本県立図書館所蔵の「池辺家文書」より発見されました。
- 上記の騒動は、熊本鎮台司令官であった谷干城が、佐賀の乱後に作成した覚書に登場しますが、今回、旧熊本藩士族の日記に関係記述が発見されたことで、確定的な事実として明らかになりました。
- この事実から、廃藩置県後の旧藩主家が、依然として旧藩地・旧藩士族に大きな影響力を有していたことが伺えます。

（概要説明）

熊本大学永青文庫研究センターの今村直樹准教授は、松井家文書及び池辺家文書の調査から、佐賀の乱にともなう熊本の騒動を示す日記を発見しました。これは、従来知られることがなかった、他県での士族反乱により誘発された旧熊本藩士族の騒動を生々しく物語るものです。

佐賀の乱にともなう熊本の騒動は、熊本鎮台司令官の谷干城が、佐賀の乱後に作成した覚書に記されています（「明治七年二月佐賀県士結党の件」『谷干城遺稿三 続日本史籍協会叢書』〔東京大学出版会、1976年覆刻版〕）。しかし、今回、鎮台側ではなく旧藩士族側である松井家及び池辺家の文書から、かつ当時の日記に関係記述が発見されたことで、上記の事実が確定されるとともに、騒動の全体像が初めて明らかになりました。

（説明）

〔背景〕

明治4（1871）年7月の廃藩置県により、旧藩主は旧藩地を離れて、東京に移住します。しかし、その家族には、政府の許可のもと、廃藩後も旧藩地に居住する者がいました。旧熊本藩主細川護久の世子護成（建千代、1868-1914）もその一人です。佐賀の乱が起こった明治7（1874）年当時、5歳の彼は、多くの家人とともに北岡邸（現北岡自然公園、熊本市中央区横手）に住んでいました。

[研究の内容]

明治7（1874）年2月、江藤新平らをリーダーとする士族反乱が佐賀で起こります（佐賀の乱）。最初にその鎮圧にあたったのが、熊本城を本営とする政府の軍隊である熊本鎮台です。しかし、佐賀に軍隊を派遣したため、本営自体の兵力が不足する事態になりました。当時の熊本では、佐賀に呼応した旧熊本藩士族による反乱が懸念されており、熊本鎮台の一部は、彼らの旧主の世子である護成を熊本城に移すことで、反乱の未然防止をはかります。しかし、旧藩士族は鎮台が護成を人質にするものと認識して強く反発し、護成がいる北岡邸を警固するために1,000人余が集まり、鎮台側と一触即発の事態となりました。こうした熊本の混乱は、2月17日から数日間続きました。

今回発見された日記は、旧熊本藩第一家老家の松井家と旧藩士族のリーダーであった池辺吉十郎のもので、松井家の日記は、熊本大学永青文庫研究センターが取り組んでいる松井家文書の調査の過程で発見されました。

以下、新発見史料の解説文と現代語訳です。なお、虫損・破損により判読困難な文字を□で示しています。

①「明治七年 日記」（松井家文書）2月19日条

【解説文】

一、熊本ニ於みて井上萬蔵列方左之通、

態与早打を以申遣候、爰許鎮台動揺ニ付而者申談、所々探索ニおよひ候得共、一体之議定ハ相分兼候へ共、県士之内二十輩、三十輩ニて北岡邸江為警衛□出候模様ニ而、溝口家杯も五、六十輩ニ□相成、段々小銃を携へニ相成候を□孫六見受申候段申出候、

（中略）

一、鎮台方

^{本ノマ、}瀧千代様御儀を御城内江御移ニ相成度旨、此許県士衆之内、横山・林某を以、御内家江懸合ニ相成候処、御断ニ相成、就而者御後口ニ丘焉様を初、其外県士之面々為御固メ千余之詰方、□^(妙)解寺近辺之寺院江詰方ニ相成□段、別紙認メ候内ニ承リ申候□、^(事)

二月十八日

【現代語訳】

一、熊本の井上萬蔵（松井家家人）たちから次のような報告があった。急ぎの手紙で報告します。こちらでは鎮台の動揺のため、旧藩士族（県士）が20人、30人の集団で、北岡邸の警固に集まっている模様です。溝口家（旧熊本藩家老家）などは、50、60人の集団で、小銃を携えている様子を孫六が見たとのことです。

（中略）

一、鎮台から、建千代（護成）様を熊本城内に移したい旨、旧藩士族の横山・林某を使者として細川家北岡邸に打診がありましたが、同邸は

お断りになりました。そこで、細川家一門（内膳家）の休焉（忠顕）様をはじめとする旧藩士族の面々が、北岡邸の警固のために1,000人余も集まっています。妙解寺付近の寺院に詰めている旨、別紙を作成中に聞きました。

明治7年2月18日

②「明治七年甲戌日記」（池辺家文書）2月17日条

【解説文】

十七日 中村同道出府、去ル十五日方佐賀県士鎮台兵与戦争相始候趣報知有之、熊本城之鎮兵大混雑、池軍氏参、旧同郷中決而雷同有之間敷段示談、加々尾を訪、遂住江氏参、鎮兵より北岡公子を城内江迎入候哉之風説有之、不期して北岡ニ参る県士、数を知らず、休焉殿達鎮静有之候得とも大混雑なり、

【現代語訳】

2月17日 中村信雄とともに熊本に出る。去る15日から佐賀県士族と鎮台兵との戦争が始まったとの知らせがあり、熊本城の鎮台兵は大混雑している。池辺軍次氏が参り、我々は決して佐賀に雷同しないことを示談した。加々尾を訪ね、次いで住江甚兵衛氏が参った。鎮台兵が北岡邸の公子（護成）を城内へ移そうとする噂があり、思いもよらず北岡邸に集まる旧藩士族が多く、彼らを細川休焉（忠顕）殿たちが鎮めているが、大混雑である。

[意義]

- 1、佐賀の乱にともなう熊本の騒動は、これまで一般的に知られておらず、この騒動について記した熊本鎮台司令官の谷干城による覚書も、佐賀の乱後に作成されたものでした。しかし今回、騒動当時の史料が、鎮台側ではなく旧熊本藩士族側から発見されたことで、事実が確定されるとともに、騒動の全体像が初めて明らかになりました。
- 2、谷干城による覚書では、護成を警固するため、北岡邸に集まった旧藩士族の数が「数百千」と記されています。しかし、①の松井家家人による報告書からは、その数が1,000人余であった事実を確定することができました。また、北岡邸警固の中心を細川家一門である内膳家が務め、そこに旧藩家老の溝口家も参加していることから、廃藩置県後も旧藩主家の運営において、旧上級家臣が大きな役割を果たしていたことがわかります。
- 3、廃藩置県後、旧藩主家は東京に移住したため、その旧藩地への影響力は弱められ、再び影響力がみられ始めるのは、西南戦争後の明治10年代以降だと理解されています。しかし今回の発見で、旧藩主家の世子の危機を察した旧藩士族が、大挙してその警固にあたったことがわかり、廃藩置県後も旧藩主家が、旧藩地・旧藩士族に依然大きな影響力を有していたことが明らかになりました。こうした旧藩主家の存在は、当時の鎮台や県にとっても無視できないものがあつたと考えられます。

なお、騒動に巻き込まれた細川護成は、明治9（1876）年10月の士族反乱

「^{しんぶうれん}神風連の乱」でも、旧藩士族である敬神党の一部が彼の擁立を図ったため、宇土への避難を余儀なくされます。その後、彼は父である旧藩主護久の決断で、同年12月に東京に移住しました。明治26（1893）年9月、彼は父護久の死を受けて、細川家の家督を相続しました。

[用語解説]

※佐賀の乱…明治7（1874）年2月、佐賀県で起こった明治政府に対する士族反乱。征韓論に敗れて帰郷した前参議江藤新平らを中心として、佐賀県の士族が「征韓・旧制度復活・攘夷」を唱えて挙兵したが、政府軍に鎮圧された。

[公開情報]

「明治七年 日記」（松井家文書）は、本年11月開催予定の附属図書館貴重資料展で公開される見込みです（文書の傷みが激しいため、パネル展示の予定）。

***永青文庫研究センター**

熊本大学附属図書館には、「永青文庫細川家資料」（約58,000点）や細川家の第一家老の文書「松井家文書」（約36,000点）の他、家臣家や庄屋層の文書群計10万点あまりが寄託・所蔵されており、永青文庫研究センターではこれらの資料群について調査分析を行っています。



細川護成（10代後半）
（公益財団法人永青文庫提供）



「明治七年 日記」2月19日条
（松井家文書、熊本大学所蔵）

【お問い合わせ先】

熊本大学永青文庫研究センター

担当：（准教授）今村 直樹

電話：096-342-2304

e-mail：eiseiken@kumamoto-u.ac.jp